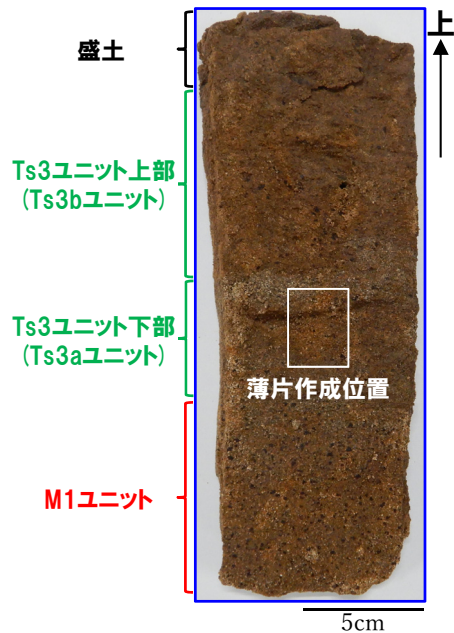
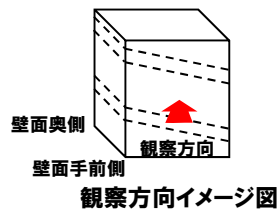


(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

①-2 Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) の成因に関する検討-横断掘削箇所① (4/4) -

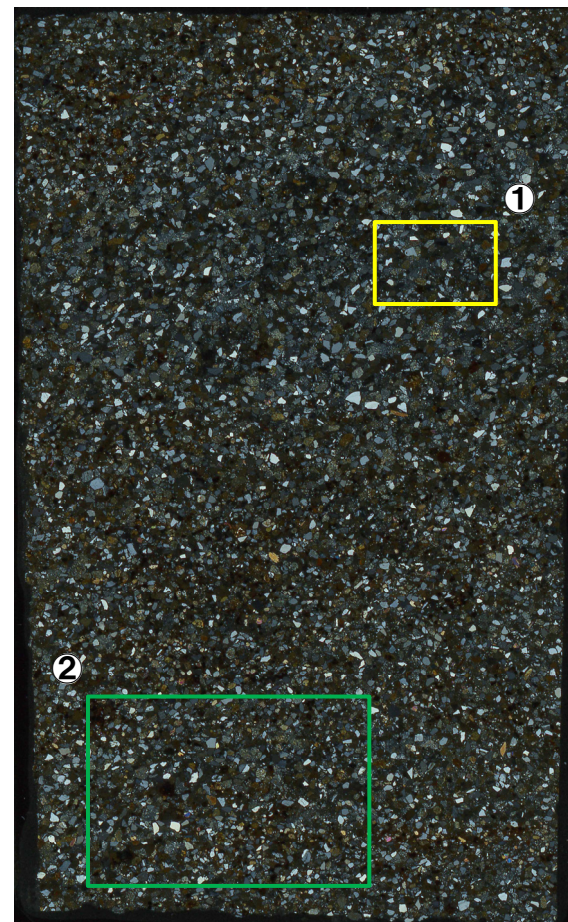


薄片試料作成位置写真 (壁面奥側)



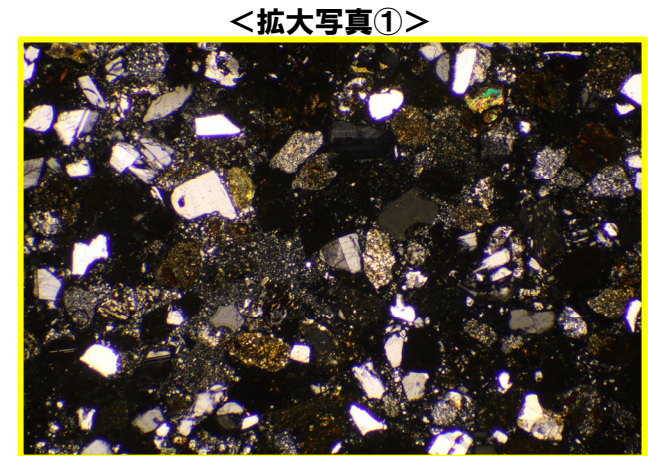
観察方向イメージ図

Ts3ユニット下部及び上部については、本検討においてTs3aユニット及びTs3bユニットに区分されることから、図中には、両方の名称を記載している。



クロスニコール

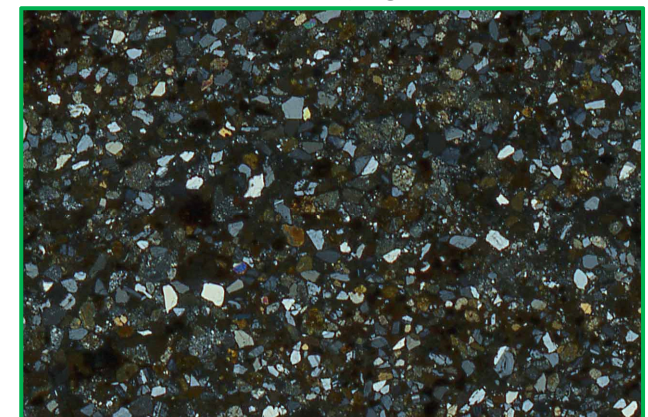
10mm



クロスニコール

<拡大写真①>

1mm



クロスニコール

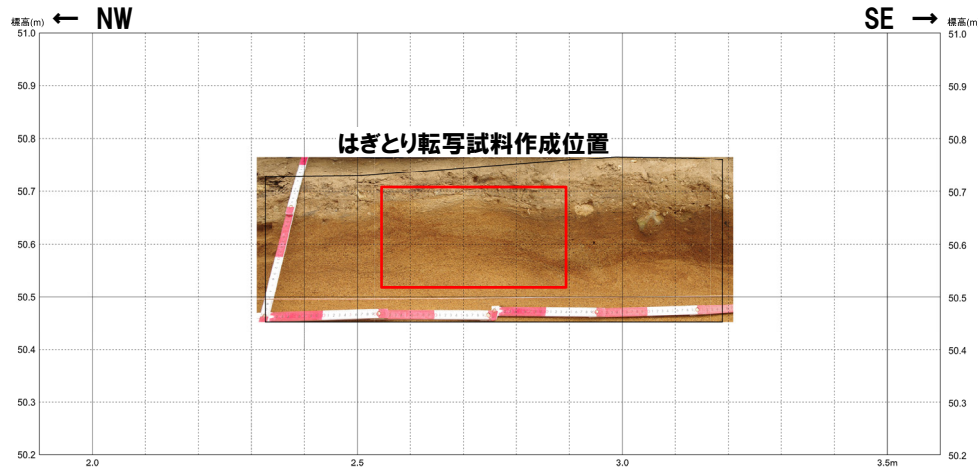
<拡大写真②>

2mm

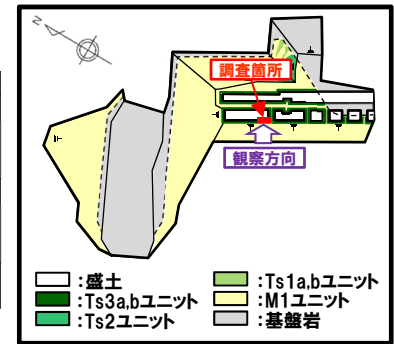
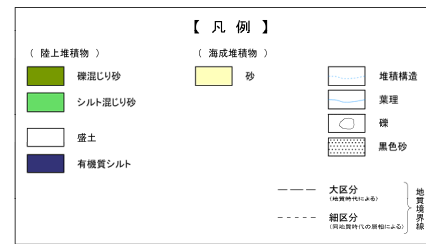
(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

①-3 Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) の成因に関する検討-海側壁面 (1/4) -

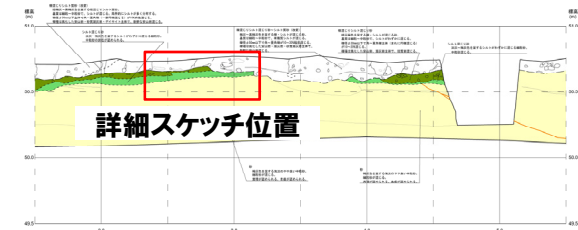
- 海側壁面距離呈2.0~3.5m付近におけるTs3ユニット下部において、詳細観察を実施した。
- 当該ユニットは、下位のM1ユニットに類似した細粒~中粒砂からなるものの、わずかにシルトが認められる。
- また、葉理等の堆積構造が認められる。



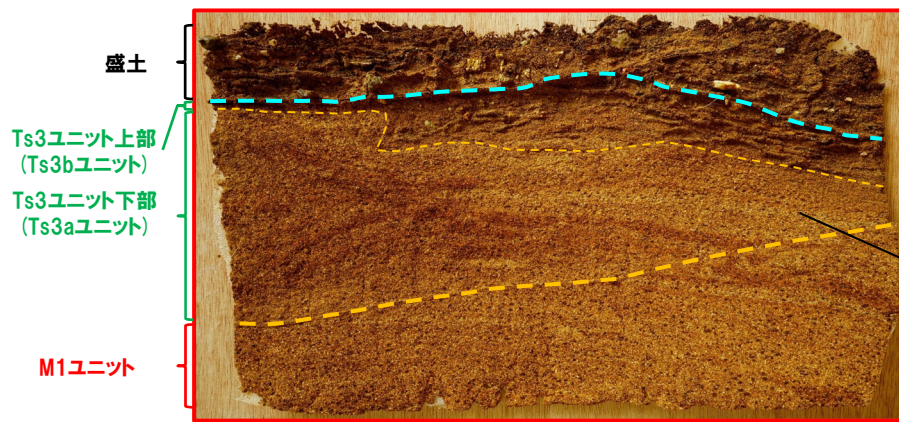
海側壁面距離呈2.0~3.5m付近 写真



開削調査箇所(南側)平面模式図



海側壁面2.0~3.5m付近 スケッチ



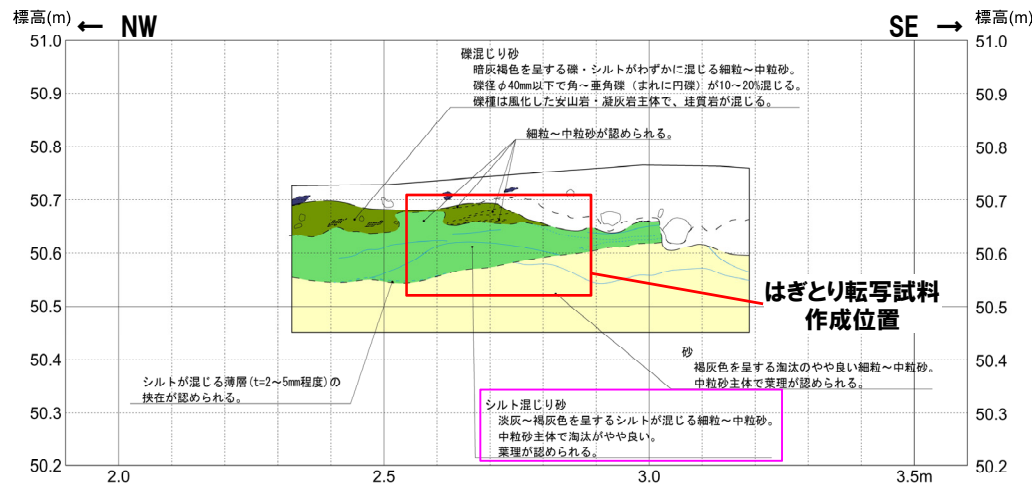
葉理等の堆積構造が認められる

Ts3ユニット下部及び上部については、本検討においてTs3aユニット及びTs3bユニットに区分されることから、図中には、両方の名称を記載している。

はぎとり転写試料写真(左右反転)(解釈線あり) 10cm

(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

①-3 Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) の成因に関する検討-海側壁面 (2/4) -

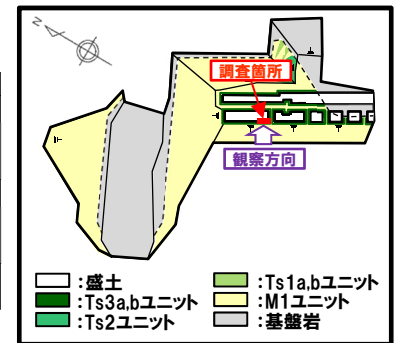
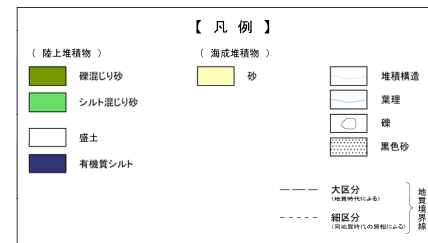


海側壁面距離呈2.0~3.5m付近 詳細スケッチ

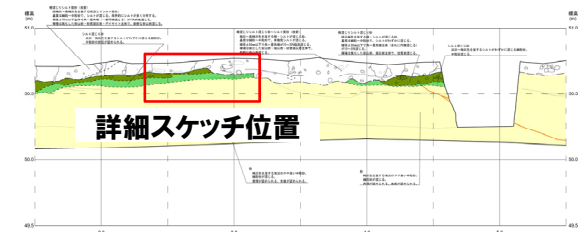


10cm

はぎとり転写試料写真 (左右反転) (解釈線なし)



開削調査箇所(南側) 平面模式図



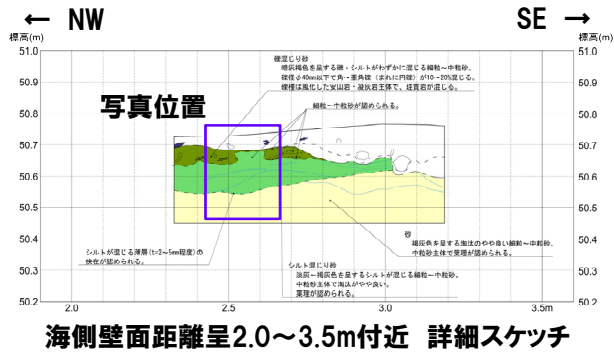
海側壁面2.0~3.5m付近 スケッチ

(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

①-3 Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) の成因に関する検討-海側壁面 (3/4) -

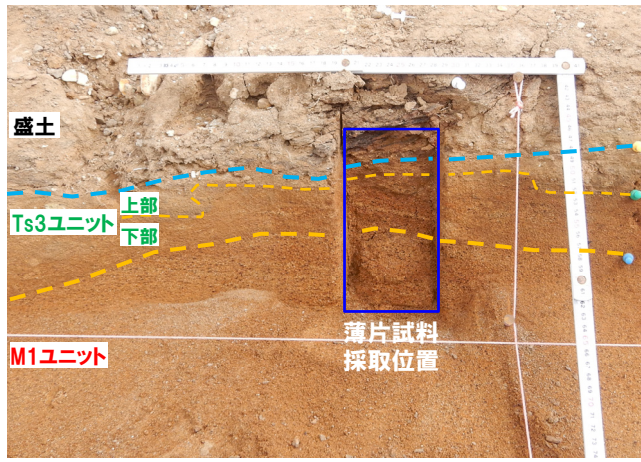
○薄片観察の結果、以下の状況が認められる。

- ・丸みを帯びた砂粒径の碎屑物を主体とし、角ばった砂粒径の碎屑物が少量混じる。粒子間に少量の粘土鉱物及び泥粒径の碎屑物が認められる。
- ・当該箇所に認められる葉理に対応した軽鉱物及び重鉱物の卓越部が層状をなす箇所や粒子間に認められる泥粒径の碎屑物の多寡が認められる。



Ts3ユニット下部及び上部については、本検討においてTs3aユニット及びTs3bユニットに区分されることから、図中には、両方の名称を記載している。

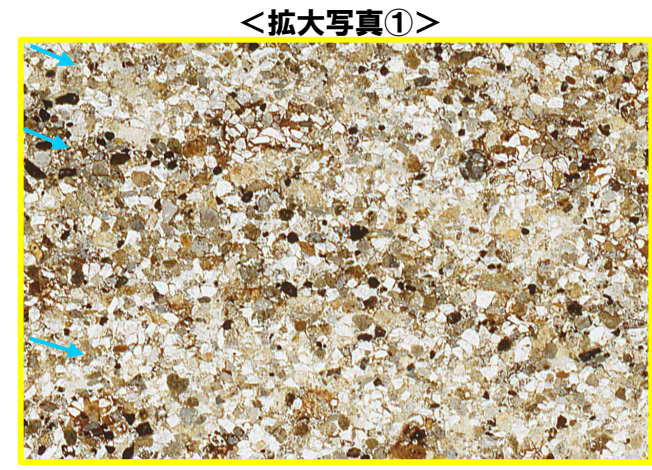
Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット)



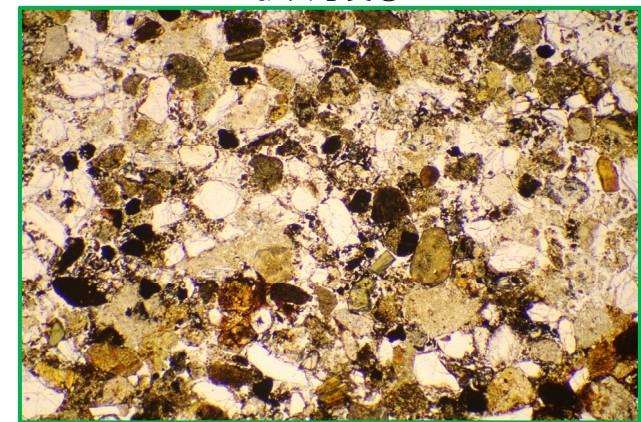
薄片試料採取位置 拡大写真



オープンニコル 10mm



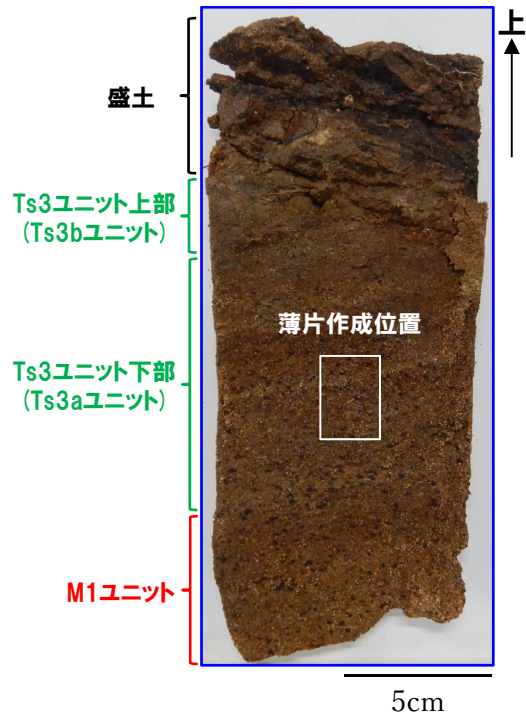
オープンニコル <拡大写真①> 2mm



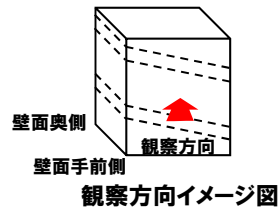
オープンニコル <拡大写真②> 1mm

(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

①-3 Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) の成因に関する検討-海側壁面 (4/4) -

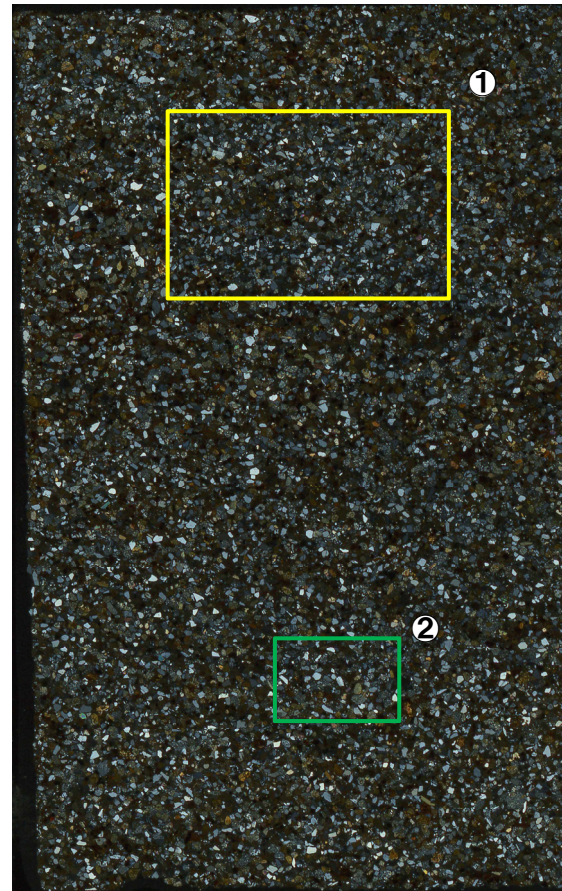


薄片試料作成位置写真 (壁面奥側)



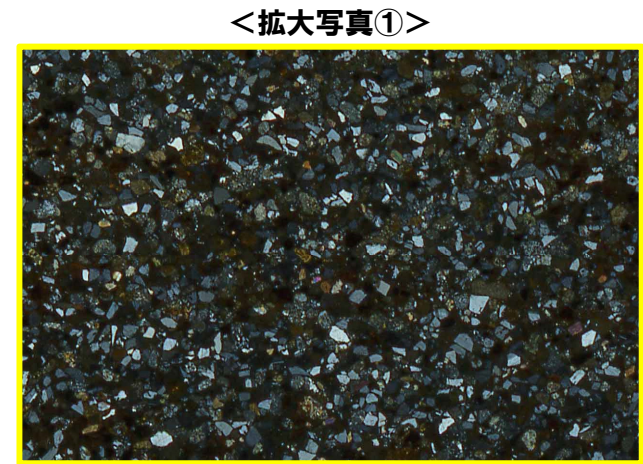
観察方向イメージ図

Ts3ユニット下部及び上部については、本検討においてTs3aユニット及びTs3bユニットに区分されることから、図中には、両方の名称を記載している。



クロスニコル

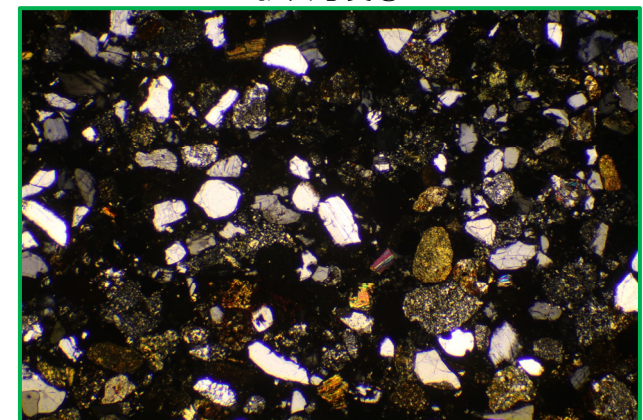
10mm



<拡大写真①>

クロスニコル

2mm



<拡大写真②>

クロスニコル

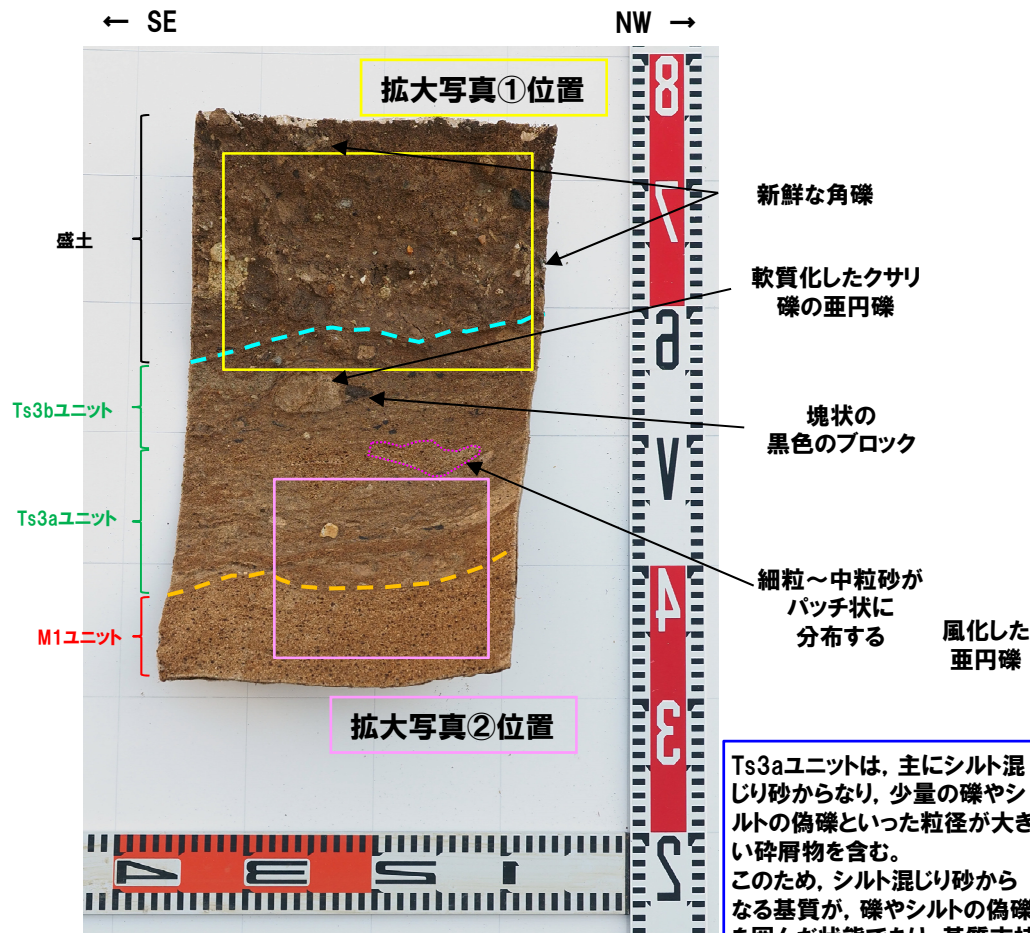
1mm

(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

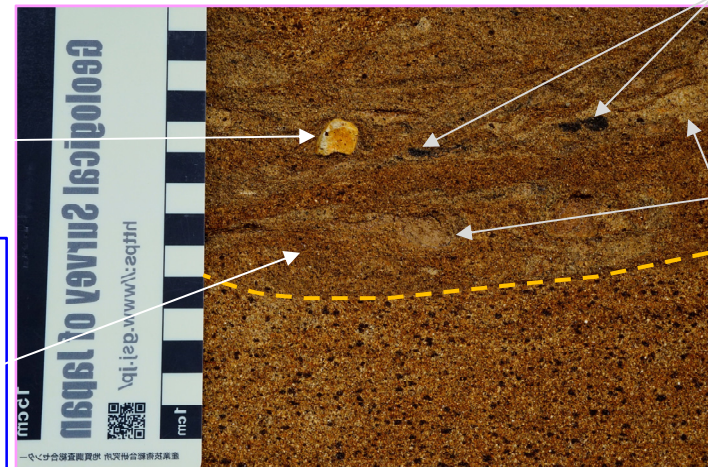
(参考) Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) 成因に関する検討-はぎとり転写試料① (1/2) -

一部修正 (R2/8/7審査会合)

- M1ユニットは、明褐灰～褐灰色を呈する砂で、細粒～中粒砂からなり、淘汰が良い。
- Ts3aユニットは、褐灰色を呈するシルト混じり砂で、細粒～中粒砂がパッチ状に分布し、風化した亜円礫が点在する。また、シルトの偽礫及び塊状の黒色のブロックが認められる。基底面は下位のM1ユニットを侵食している。
- Ts3bユニットは、暗褐灰色を呈する礫混じりシルト混じり砂で、軟質化したクサリ礫の亜円礫及び塊状の黒色のブロックが認められる。
- 盛土は、暗褐灰色を呈するシルト混じり礫質砂～礫混じり砂～礫混じりシルト質砂で、層相変化が著しく、不均質な層相を示す。新鮮な角礫が混じる。



拡大写真① (左右反転) (解釈線あり)



拡大写真② (左右反転) (解釈線あり)

Ts3aユニットは、主にシルト混じり砂からなり、少量の礫やシルトの偽礫といった粒径が大きい碎屑物を含む。このため、シルト混じり砂からなる基質が、礫やシルトの偽礫を囲んだ状態であり、基質支持の組織を示す。

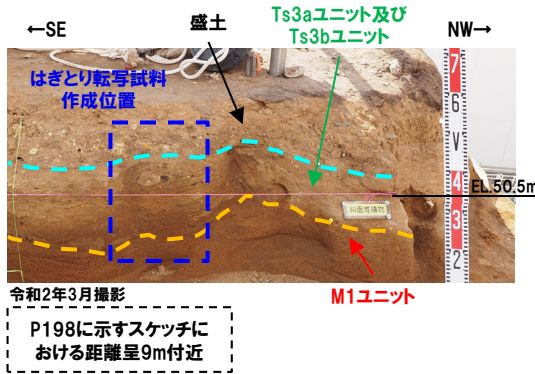
当頁は、P200の再掲であるが、青囲みの記載を加筆している。

はぎとり転写試料写真(左右反転)(解釈線あり)

(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

(参考) Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) 成因に関する検討-はぎとり転写試料① (2/2) -

一部修正 (R2/8/7審査会合)



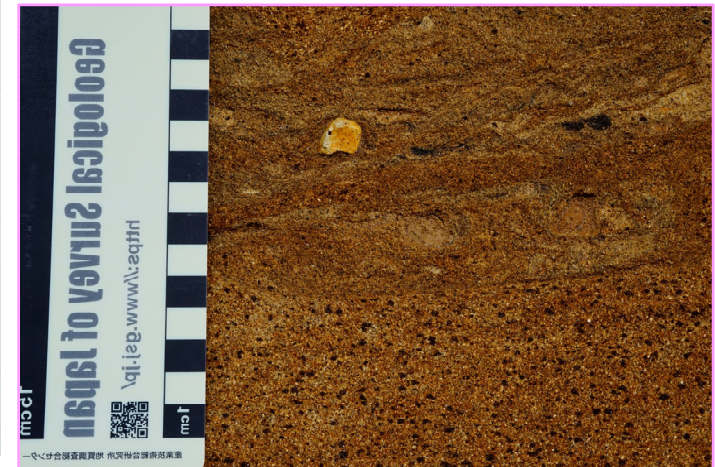
はぎとり転写試料①作成位置



はぎとり転写試料写真(左右反転) (解釈線なし)



拡大写真①(左右反転) (解釈線なし)



拡大写真②(左右反転) (解釈線なし)

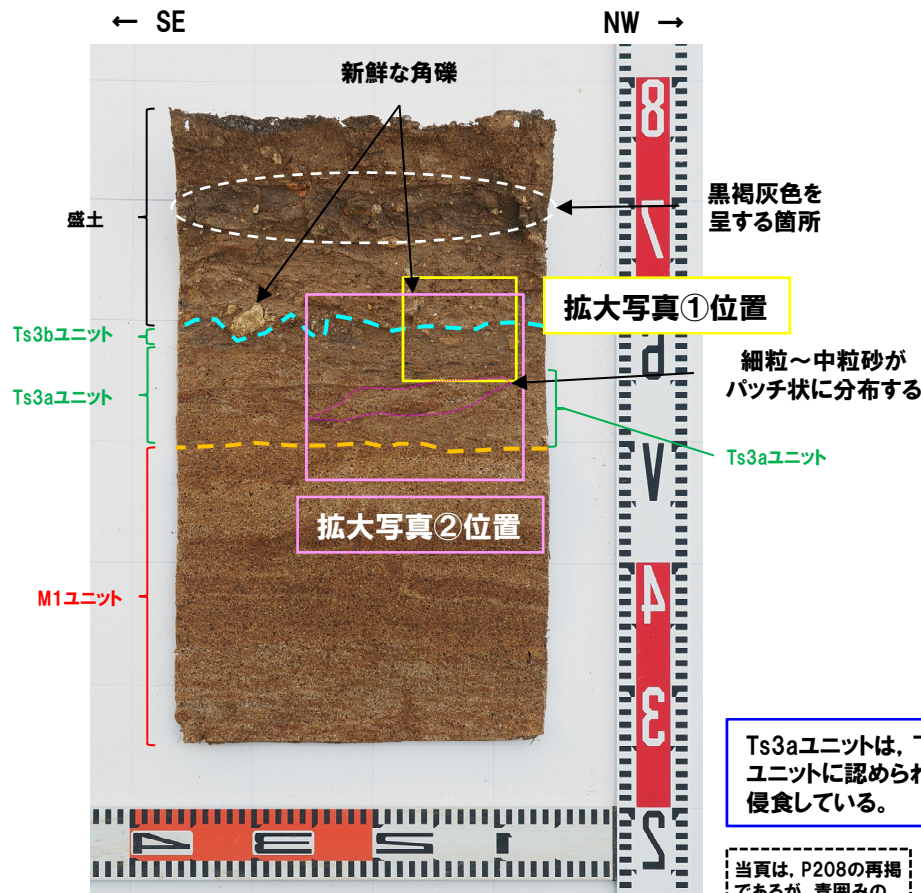
当頁は、P201の再掲。

(2) Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

(参考) Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) 成因に関する検討-はぎとり転写試料③ (1/2) -

一部修正 (R2/8/7審査会合)

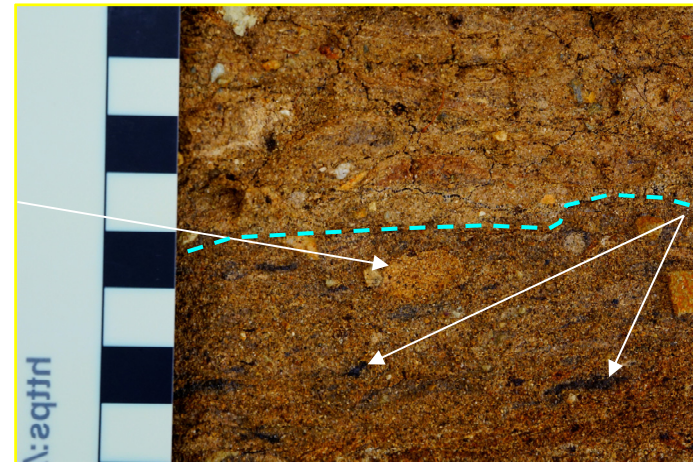
- M1ユニットは、明褐灰～褐灰色を呈する砂で、細粒～中粒砂からなり、淘汰が良い。葉理が認められる。
- Ts3aユニットは、褐灰色を呈するシルト混じり砂で、細粒～中粒砂がパッチ状に分布する。また、下位のM1ユニットに認められる葉理を侵食している。
- Ts3bユニットは、暗褐灰色を呈する礫混じりシルト混じり砂で、風化した亜円礫及び塊状の黒色のブロックが認められる。
- 盛土は、暗褐灰～黒褐灰色を呈する礫混じり砂で、不均質な層相を示す。新鮮な角礫が混じり、黒褐灰色を呈する箇所が認められる。



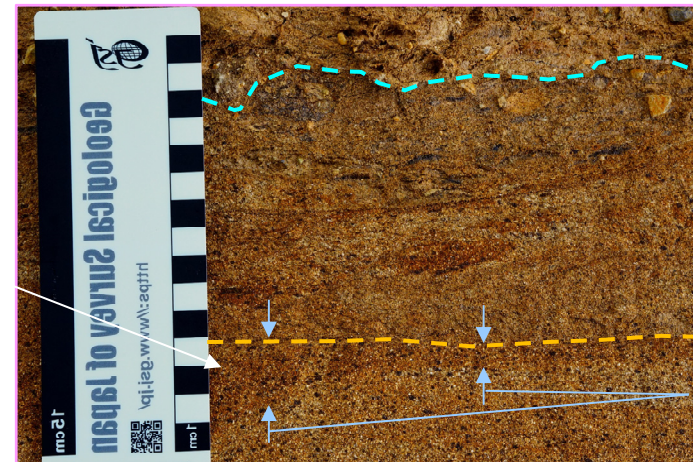
はぎとり転写試料写真 (左右反転) (解釈線あり)

Ts3aユニットは、下位のM1ユニットに認められる葉理を侵食している。

当頁は、P208の再掲であるが、青囲みの記載を加筆している。



拡大写真① (左右反転) (解釈線あり)

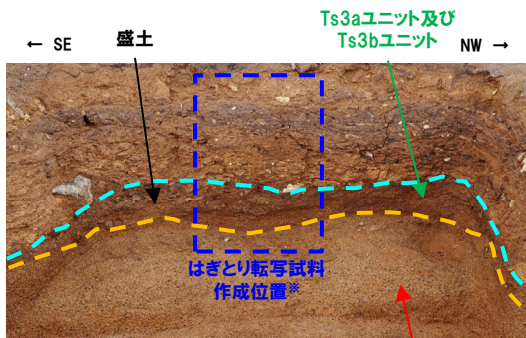


拡大写真② (左右反転) (解釈線あり)

(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

(参考) Ts3ユニット下部 (Ts3aユニット) 成因に関する検討-はぎとり転写試料③ (2/2) -

一部修正 (R2/8/7審査会合)



令和2年3月撮影

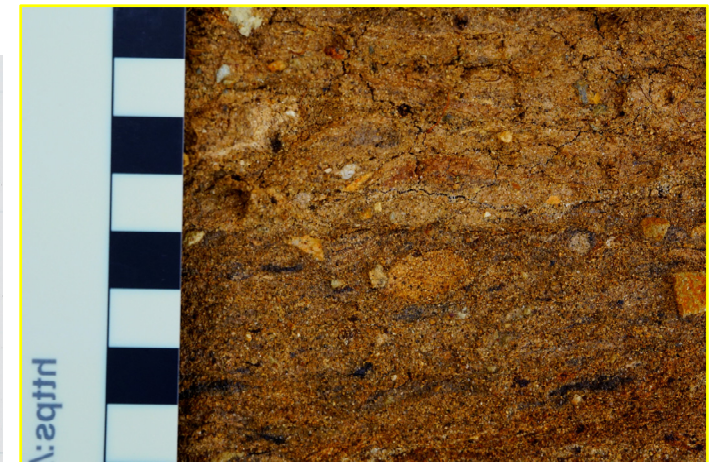
P198に示すスケッチにおける距離呈4.5m付近

※横断掘削箇所①の掘削時に、基底の盤下げを行った上で、はぎとり転写試料を作成した。

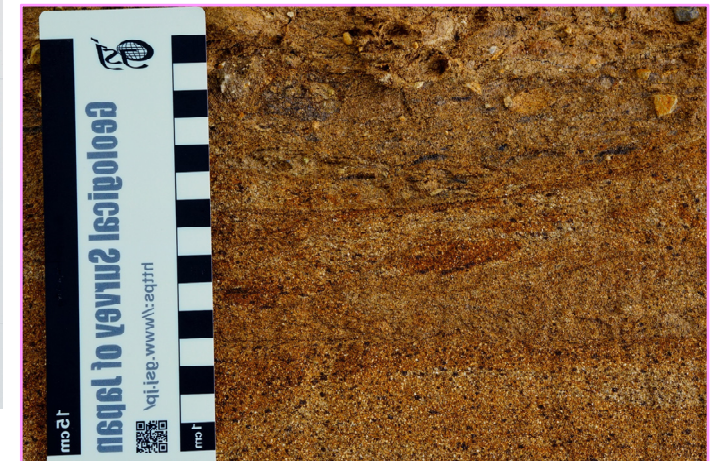
はぎとり転写試料③作成位置



はぎとり転写試料写真(左右反転)(解釈線なし)



拡大写真①(左右反転)(解釈線なし)



拡大写真②(左右反転)(解釈線なし)

当頁は、P209の再掲。

(2) Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

②各ユニットの堆積時期に関する検討-検討の目的-

- 先の検討の結果、Ts3aユニットは、小規模な土砂流によって堆積した堆積物であり、Ts3bユニットは、M1ユニットに挟在するTs1aユニット、Ts1bユニット及びTs2ユニットと同様、旧海食崖の局所的な崩落によって堆積した堆積物と判断される。
- Ts3aユニット及びTs3bユニットを用いてF-1断層の活動性を評価するに当たっては、その堆積時期が重要であり、堆積時期を把握するため、下位に分布する海成堆積物であるM1ユニットとの関係を明らかにする必要がある。
- M1ユニット中には、明瞭な時間間隙を示す不整合面が認められないことから(P166～P177参照)、M1ユニットは、一連の海水準上昇により堆積した海成堆積物であると判断される。
- Ts3aユニットとM1ユニットの境界面は、下位のM1ユニットの一部の葉理をTs3aユニットがほぼ水平に侵食する侵食面であり(P308参照)、Ts3bユニットとM1ユニットの境界面は、同様な侵食面であるが、それらの境界面付近に、一般的に明瞭な時間間隙を示す傾斜不整合、土壌化等の構造は認められない。
- また、開削調査箇所(北側)～開削調査箇所(南側)～E-1ボーリングの範囲において、分布高度が標高約54mに達するM1ユニットを含む砂層が広く分布している(P314～P316参照)。
- この広く分布する砂層については、以下の状況から、同様な堆積場で、一連の海水準上昇により堆積した海成堆積物であると考えられる。
 - ・いずれも標高約45mの平坦な基盤岩上に分布し、背後に旧海食崖が分布する(P314～P316参照)。
 - ・開削調査箇所(北側・南側)において、明瞭な時間間隙を示す不整合面が認められない。
- Ts3aユニット及びTs3bユニットは、この海成堆積物の分布高度内で、M1ユニットを直接覆って標高約50.5mに分布することから、海成堆積物に挟在していたものと推定され、これらのユニットは整合関係で、一連の堆積物であるものと考えられる。
- 一方で、開削調査箇所(南側)においては、以下の状況が認められる。
 - ・Ts3aユニット及びTs3bユニットの一部を含む上位の地層が改変に伴い消失していることから、現在、Ts3aユニット及びTs3bユニットは、地表付近に位置している(P318参照)。
 - ・1,2号炉建設前には、比高1～2m程度の浅い谷地形が認められる*(P319参照)。
- また、開削調査箇所(南側)と同様に平坦面又は緩斜面上に位置し、原地形が残存しているA地点及びC地点においては、海成堆積物を覆う後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物と考えられる堆積物が認められる(詳細はP320参照)。
- 以上のことから、M1ユニット、Ts3aユニット及びTs3bユニットは、整合関係で、一連の堆積物であることの妥当性を確認するとともに、Ts3aユニット及びTs3bユニットについては、後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物との差異を明確にする必要がある。

※敷地の1,2号炉建設前の地形については、過去の空中写真及び地形図を比較した結果、大きな地形改変は認められないことを確認している(補足説明資料3章参照)。

(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

②各ユニットの堆積時期に関する検討-検討方法及び検討結果(1/3)-

○そこで、開削調査箇所(南側)に認められる層相が異なる各ユニットを対象とした鉱物の屈折率測定・主成分分析結果の確認(下表の青囲みの範囲に示す(i)の確認)から、各ユニットの供給源が類似していることを確かめた上で、各ユニットに認められる火山ガラスの特徴に関する比較(次頁に示す(ii)の検討)、斜長石を用いた各ユニットの具体的な堆積物の供給源に関する検討(次頁に示す(iii)の検討)並びに斜面堆積物であるTs3aユニット及びTs3bユニットと後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物との比較(P313に示す(iv)の検討)を実施することとした。

(i)各ユニットを対象とした鉱物の屈折率測定・主成分分析結果の確認(表の青囲み範囲)

○各ユニットは、以下のことから、類似した供給源の堆積物からなるものと考えられる。

- ・火山ガラスの屈折率測定・主成分分析の結果、洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスは認められない。
- ・重鉱物の屈折率測定の結果、概ね同様な範囲にブロードな頻度分布を示し、特有なピークは認められない。
- ・重鉱物の主成分分析の結果、主元素組成の各分布範囲は、概ね同様である。
- ・斜長石の屈折率測定・主成分分析の結果、主に中性斜長石の範囲を示すものが多い。

<各ユニットの堆積相観察及び鉱物の屈折率測定・主成分分析結果の整理>

ユニット名	上位層	堆積相観察		火山ガラスの屈折率測定・主成分分析(P266~P273参照)	重鉱物の屈折率測定・主成分分析(P266~P270及びP274~P277参照)	斜長石の屈折率測定・主成分分析(P279~P286参照)
		層相	上位層との層相境界			
Ts3bユニット	-	・Ts3bユニットは、礫混じりシルト混じり砂の層相を示し、M1ユニットに挟在するTs1aユニット(礫質砂)、Ts1bユニット(礫質砂)及びTs2ユニット(礫質シルト混じり砂)と類似する	-	・洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスは認められない	・屈折率は、M1ユニット、M1ユニットに挟在するTs1ユニット及びTs2ユニットと概ね同様な範囲にブロードな頻度分布を呈し、特有なピークは認められない ・主元素組成の各分布範囲は、M1ユニットとM1ユニットに挟在するTs1ユニット及びTs2ユニットと概ね同様である	・主に中性斜長石の範囲を示すものが多い
Ts3aユニット	Ts3bユニット	・Ts3aユニットは、シルト混じり砂の層相を示し、Ts3bユニットは、礫混じりシルト混じり砂の層相を示すことから、異なる	・明瞭ではない	-*	-*	・主に中性斜長石の範囲を示すものが多い
M1ユニット	Ts3bユニット	・M1ユニットは、淘汰のいい細粒~中粒砂の層相を示し、Ts3bユニットは、礫混じりシルト混じり砂の層相を示すことから、明瞭に異なる	・Ts3bユニット基底面は、M1ユニットを侵食する	・洞爺火山灰(Toya)に対比される火山ガラスは認められない	・屈折率は、Ts3bユニットと概ね同様な範囲にブロードな頻度分布を呈し、特有なピークは認められない ・主元素組成の各分布範囲は、Ts3bユニットと概ね同様である	・主に中性斜長石の範囲を示すものが多い
	Ts3aユニット	・M1ユニットは、淘汰のいい細粒~中粒砂の層相を示し、Ts3aユニットは、シルト混じり砂の層相を示すことから、明瞭に異なる ・Ts3aユニットは、わずかにシルトが混じり、M1ユニットに類似した細粒~中粒砂からなり、葉理等の堆積構造が認められる	・Ts3aユニット基底面は、M1ユニットを侵食する			

*Ts3aユニットについては、屈折率測定及び主成分分析を実施していない。

(次頁へ続く)

(2) Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

②各ユニットの堆積時期に関する検討-検討方法及び検討結果(2/3)-

(前頁からの続き)

(ii) 各ユニットに認められる火山ガラスの特徴に関する比較(火山ガラスの屈折率測定・主成分分析)(P322~P326参照)

○M1ユニット及びTs3bユニットとM1ユニットに挟在するTs1bユニット及びTs2ユニットに認められる火山ガラスにおいて、屈折率の頻度分布範囲及び主元素組成の分布範囲は、概ね同様である。

○また、各ユニットには、町田・新井(2011)において、敷地周辺に到達しているとされている後期更新世のテフラ(AT, Kt-2, Aso-4, Toya及びKc-Hb)及びSpfa-1に対比される火山ガラスは認められない。

(iii) 斜長石を用いた各ユニットの具体的な堆積物の供給源に関する検討(斜長石の屈折率測定・主成分分析)(P328~P331参照)

○M1ユニット、Ts3aユニット及びTs3bユニットに認められる斜長石は、主に中性斜長石の範囲を示すものが多いことから、各ユニットを構成する堆積物の供給源は類似しており、敷地及びその付近に広く分布する新第三系下部~上部中新統古平層及び新第三系上部中新統神恵内層の安山岩由来であると推定される。

○また、Ts3aユニット及びTs3bユニットの供給源は、基盤岩(旧海食崖)のうち火山礫凝灰岩由来による影響が大きいものと考えられ、敷地の基盤をなす地層は神恵内層であることから、これらのユニットの具体的な供給源は、神恵内層由来であると判断される。

(次頁へ続く)

(2) Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

②各ユニットの堆積時期に関する検討-検討方法及び検討結果(3/3)-

(前頁からの続き)

(iv) 斜面堆積物であるTs3aユニット及びTs3bユニットと後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物との比較

- 地形の観点から、Ts3aユニット及びTs3bユニット(分布標高約50.5m)は、開削調査箇所(南側)付近においては、分布高度が標高約54mに達するM1ユニットを含む砂層が広く分布していたこと及び1,2号炉建設前の地表面(標高約54m~57m)から約5m低い標高に位置していたことを踏まえると、1,2号炉建設前に当該箇所付近に比高1~2m程度の浅い谷地形が認められたことを考慮しても、地表付近に堆積した堆積物ではないことから、後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物とは異なるものと考えられる。
- 次に、地質学的な分析の観点からも、Ts3aユニット及びTs3bユニットと、平坦面又は緩斜面上に位置し、原地形が残存しているA地点及びC地点に認められる海成堆積物を覆う後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物との比較を行った。

【火山ガラス及び重鉱物分析結果(P334~P349参照)】

- 後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物は、開削調査箇所(南側)に認められる斜面堆積物(M1ユニットに挟在するTs1bユニット及びTs2ユニット並びにTs3bユニット)と比較して、以下の状況が認められる。
 - ・火山ガラスの屈折率測定及び主成分分析の結果、後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物には、Toya及びSpfa-1が認められ、開削調査箇所(南側)に認められる斜面堆積物とは異なる。
 - ・重鉱物の屈折率測定の結果、後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物には、開削調査箇所(南側)に認められる斜面堆積物とは異なり、Toya及びSpfa-1に認められる特徴的な屈折率の値(Toya:1.760付近, Spfa-1:1.730付近)を示す重鉱物が確認され、この結果は、火山ガラスの主成分分析の結果と調和的である。

【斜長石分析結果(P350~P354参照)】

- 後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物は、開削調査箇所(南側)に認められる斜面堆積物(M1ユニットに挟在するTs1aユニット, Ts1bユニット及びTs2ユニット並びにTs3aユニット及びTs3bユニット)と比較して、以下の状況が認められる。
 - ・斜長石分析の屈折率測定の結果、後期更新世以降に堆積した氷期の陸上堆積物は、バイモーダルな頻度分布を呈しており、開削調査箇所(南側)に認められる斜面堆積物とは異なる。

○(i)~(iv)の検討の結果、M1ユニット、Ts3aユニット及びTs3bユニットが整合関係で、一連の堆積物であることは、妥当であると判断される。



○M1ユニット、Ts3aユニット及びTs3bユニットは、地質学的時間スケールにおいてほぼ同時に堆積したものであると判断される(Ts3aユニット及びTs3bユニットの堆積状況については、P542参照)。

(2) Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

②各ユニットの堆積時期に関する検討-開削調査箇所(南側)付近における堆積物の分布状況(1/5)-

一部修正(H31/2/22審査会合)

○開削調査箇所(北側), F-1断層開削調査箇所, 1,2号炉調査時のボーリング調査等の結果を用いて, 開削調査箇所(南側)付近における概ね汀線直交方向(1-1'断面及び2-2'断面)及び概ね汀線方向(3-3'断面)の基盤岩及び堆積物の分布状況を確認した(断面図は, 次頁参照)。

【1-1'断面】

○A-5ボーリングとF-1断層開削調査箇所の基盤岩上面の比高から, 旧海食崖の存在が推定され, 旧海食崖の前面には, 標高約54mまで砂層が認められ, その上位に砂礫層及び砂層が認められる。

【2-2'断面】

○E-1ボーリングとA-6ボーリングの基盤岩上面の比高から, 旧海食崖の存在が推定され, 旧海食崖の前面には, 標高約54mまで砂層が認められる。

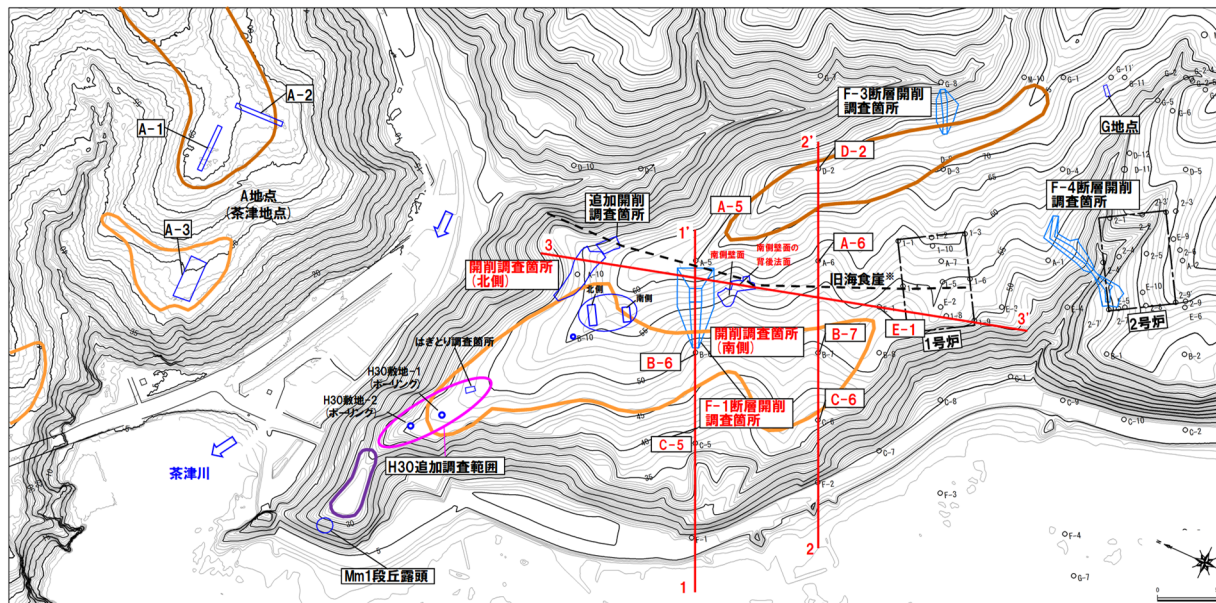
【3-3'断面】

○平坦な基盤岩が連続し, 開削調査箇所(南側)の北側(F-1断層開削調査箇所及び開削調査箇所(北側))と南側(E-1ボーリング)に, 標高約53~54mまで砂層が認められる。

○開削調査箇所(北側)~開削調査箇所(南側)~E-1ボーリングの範囲において, 分布高度が標高約54mに達するM1ユニットを含む砂層が広く分布している。

○この広く分布する砂層については, 以下の状況から, 同様な堆積場で, 一連の海水準上昇により堆積した海成堆積物であると考えられる。

- ・いずれも標高約45mの平坦な基盤岩上に分布し, 背後に旧海食崖が分布する。
- ・開削調査箇所(北側・南側)において, 明瞭な時間間隙を示す不整合面が認められない。



F-1断層開削調査箇所付近

調査箇所	調査箇所
F-4断層開削調査箇所	A地点
F-1断層開削調査箇所	G地点
F-1断層開削調査箇所近傍露頭1	F-3断層開削調査箇所
F-1断層開削調査箇所近傍露頭2	Mm1段丘露頭
H30追加調査範囲	
開削調査箇所(北側)	
追加開削調査箇所	
開削調査箇所(南側)	

当図は, 国土地理院1976年撮影の空中写真を
使用した空中写真図化により作成(1mコンター)

【凡例】

	Mm1段丘面		原子炉建屋設置位置
	Hm3段丘面		鉛直ボーリング
	Hm2段丘面		

※追加開削調査箇所及び開削調査箇所(南側)において, 旧海食崖を確認している。

調査位置図(改変前の地形)

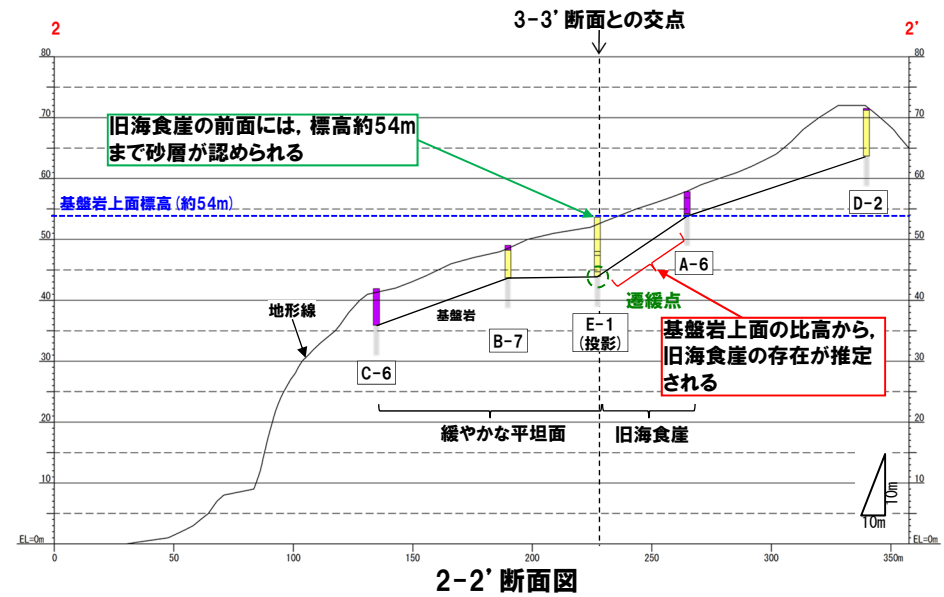
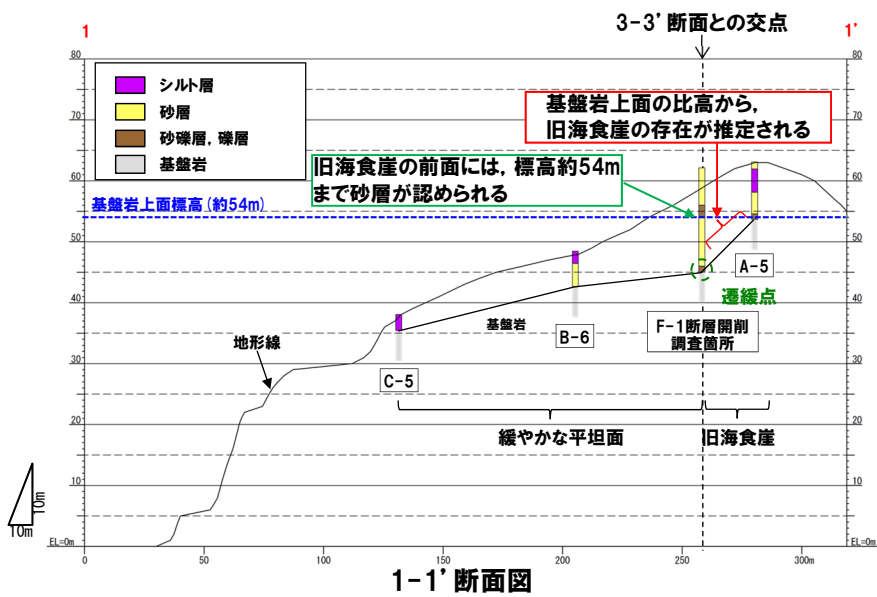
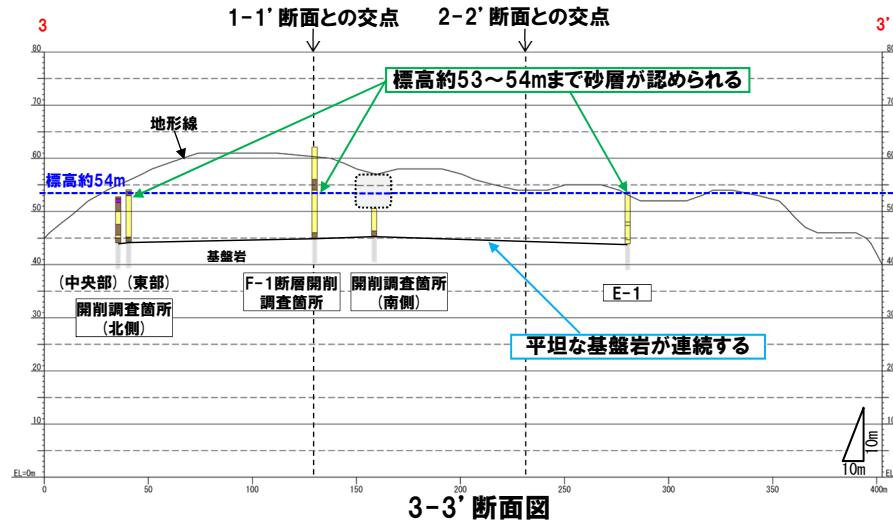
(2) Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

②各ユニットの堆積時期に関する検討-開削調査箇所(南側)付近における堆積物の分布状況(2/5)-

一部修正(H31/2/22審査会合)

断面図作成に用いたボーリングは、いずれも1,2号炉調査時のボーリング

○: 変更のため地質状況が不明な範囲



(2)Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

②各ユニットの堆積時期に関する検討-開削調査箇所(南側)付近における堆積物の分布状況(3/5)-

一部修正(H31/2/22審査会合)

孔口標高:53.62m



コア写真(E-1:深度0~21m)

E-1 孔口標高 53.62m 掘進長 103.70m

標尺	標高 (m)	深度 (m)	柱状図	地質名	色調	記 事
1				砂	褐	所々シルト分の混入多い。
2						
3						
4						
5						
6	48.02	5.80		凝り砂		
7	47.37	6.25				
8				シルト質砂	暗褐	ほぼ均質。 黒色の薄層状存在。
9	44.72	8.90				
10	43.92	9.70		凝りシルト質砂	褐	小円礫(径3cm前後)点在。
11			△△△△	火山礫凝灰岩	褐 灰	12.30mまで風化著しい。
12						
13	40.72	12.90		砂質凝灰岩		全体に風化受け礫状コアが大部分。
14	39.32	14.30				
15			△△△△	火山礫凝灰岩		14.40~14.50m 褐色に風化している。
16	37.42	16.20				
17			△△△△	凝灰角礫岩	灰	黒色安山岩礫を含む。礫径最大15cm。 多くは5cm以下。 マトリックスはやや堅質。
18						
19						
20						
21						

柱状図(E-1:深度0~21m)

余白

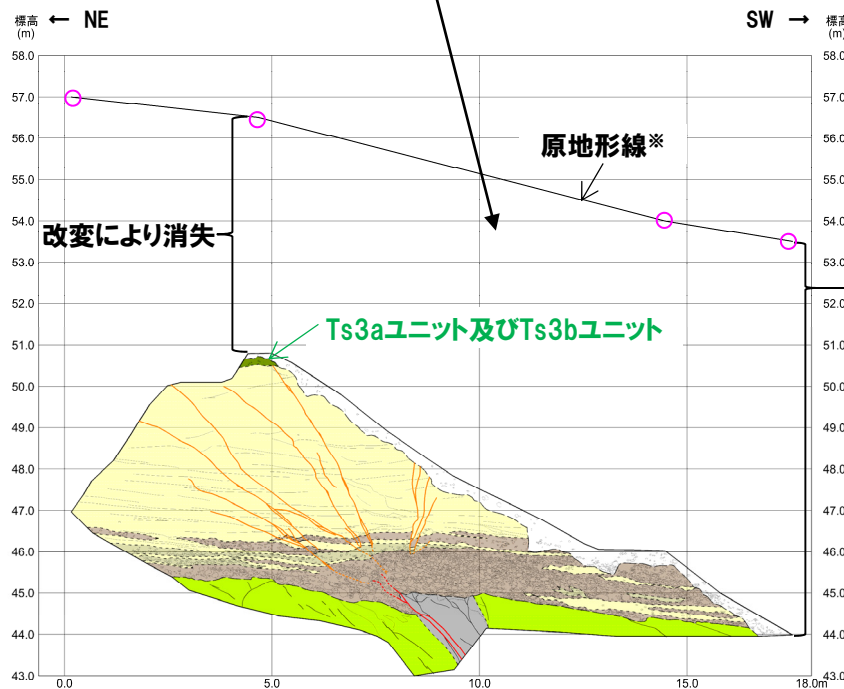
(2) Ts3aユニットの成因及び各ユニットとの関係

②各ユニットの堆積時期に関する検討-開削調査箇所(南側)付近における堆積物の分布状況(4/5)-

一部修正(R2/4/16審査会合)

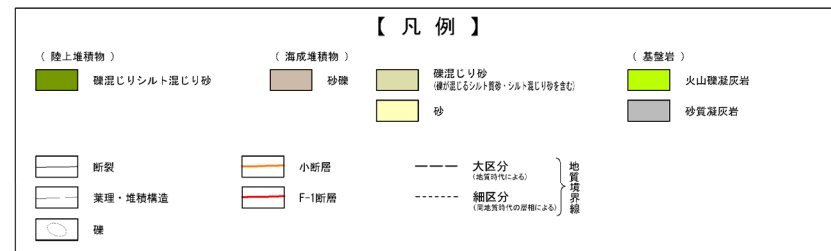
- 開削調査箇所(南側)においては、Ts3aユニット及びTs3bユニットの一部を含む上位の地層が改変に伴い消失していることから、現在、Ts3aユニット及びTs3bユニットが地表面付近に位置している。
- Ts3aユニット及びTs3bユニット(標高約50.5m)は、1,2号炉建設前の地表面(標高約54m~57m)から約5m低い標高に位置していた。

開削調査箇所(南側)南側壁面付近の1,2号炉建設前の標高は約54~57mであり、約5~10m程度改変により消失している。



※南側壁面のスケッチは、壁面が傾斜しているため、壁面に対し、平行投影をして描いたものであることから、原地形線は、傾斜した壁面における4点(左図○)の地形図(次頁参照)上の標高を結び、描いている。

改変により消失



開削調査箇所(南側)南側壁面 改変状況